

博士論文要旨

論文題名：京都祇園祭の山鉾行事の存立システムに関する研究 —現代都市における祭礼の継承—

立命館大学大学院文学研究科
行動文化情報学専攻博士課程後期課程

サトウ ヒロタカ

佐藤 弘隆

本研究は、京都祇園祭の山鉾行事の諸組織・集団の役割と関係性を構造的に捉え、各山鉾を支える人員・資金・場所の確保に果たす地縁共同体の機能を明らかにし、現代都市における伝統的な祭礼の継承の在り方を考察したものである。

筆者は前近代・近代・現代の時代区分ごとに山鉾行事を支える諸組織・集団の役割や関係性を網羅的に明らかにし、全時代の諸組織・集団を5つに類型化した。これらの関係性は「行事全体」と「個別山鉾」の2段階のスケールのなかに位置づけられ、各スケールには、社会・空間的に区分された重層的な都市構造が存在する。筆者はこれを「行事全体の存立構造」と「個別山鉾の存立構造」と名付けた（「山鉾行事の存立構造」と総称した）。

個別山鉾の存立構造において、山鉾運営に中心的な役割を果たす運営組織は地縁共同体によって担われ、社会・空間的に区分された重層的な都市構造を再編しながら祭礼運営に必要な人員・資金・場所を確保してきた。筆者はこの社会・経済・場所的基盤を「山鉾の運営基盤」と名付けた。

筆者は、各時代の事例から山鉾行事の存立の仕組みを全時代的に共通する枠組で捉え、それを「山鉾行事の存立システム」として提示した。これを通時的に比較することで山鉾行事を支える「意味」や「縁」が見出された。

前近代の山鉾行事は、「町内の祭礼」であり、行事全体においては「それらの集合体」に過ぎなかった。それが、近代では行事全体の存立構造の再構築により、「山鉾町全体の祭礼」や「氏子全体の祭礼」として意味づけがなされ、現代では、「市民の祭礼」や「日本国民の祭礼」というように祭礼の意味が多様化した。その一方で、個別山鉾の存立構造では、運営組織を中心とした実働組織や補助組織への請け負い関係が維持されることにより、「町内の祭礼」という意味が現代も強く根付いている。また、各山鉾では、多様な「縁」が時代や町内の社会構成の変化に合わせて生み出され、それらは運営基盤を再構築する基準・論理となった。

近代以降、行事全体の存立構造と各山鉾の運営基盤は常に再構築されてきた。そして、この再構築に支えられることで、地縁共同体は運営組織としての伝統性を維持できた。この変化と維持の両立こそが現代都市における伝統的な祭礼の継承に繋がっているのである。